

INTERVIEW



時間をコントロールする感覚は
紙の本だから味わえるもの

幅 允孝

オンライン書店の台頭で
街の本屋から熱が減退

大学を卒業してすぐ、バックパックの旅に出ました。モントリオールのジャズフェスティバル、ニューヨーク公共図書館、建築家アルヴァ・アアルトがデザインしたフィンランドの本屋……。どれも僕の中のエンドルフィンが分泌されるくらい大好きなものでしたが、じつは本で読んだだけ。そこで、この機会に気になるものはすべて自分の目で見ておこうと思ったのです。

実際に訪ねてみると、本に書いてあった内容と少し違うな？と思うことが多々あって、その時、本の限界というものを知りました。同時に、自分の中で物差しができたおかげで、対象物と自分の距離を実測できるようになりました。



18歳、初めて訪れたロンドン旅行。

「来週の会議のための読書もいいですが、
いつ芽が出るかわからない、目的のない
読書もいいものですよ」



それまで本というものはただ楽しく読んでいたのですが、「こんな編集をしたらもっと共感してもらえるんじゃないかな」などと、客観的に向き合えるようになったのも旅の恩恵です。就職は同年代のみならずより一年遅れましたが、とてもいい経験になりました。

帰国後、たまたま「青山ブックセンター」が求人を出していたので応募したところ運よく受かり、社員として働くことになりました。仕事は結構忙しくて、朝出社したら商品の検品、仕分け、陳列、レジ打ち、発注など、あつという間に1日が終わっていきます。業務自体に不満があったわけではありませんが、2000年にアマゾンが日本語サイトを立ち上げたことが、退職するきっかけとなりました。当初はさほど危機感を抱いていませんでしたが、ネット回線が拡大するに従って、お店の売り上げも大幅にダウン。そして来店客数も激減しました。本というのは著者以外の誰かが読んで初めて本として成立すると思っています。本屋にふらつと立ち寄って誰かがページをパラパラとめくっていくことで徐々に熱が溜まっていくものだと。それが、客足が途絶えることで店自体から熱が減退していくわけで、この状況はさすがにまずいなど。

ヨチヨチ歩きだったのが
突然歩調が合う瞬間がたまらない

「本屋に人が来ないのなら、人のいる場所に本を持っていこう」。そんな動機からブックディレクターとして現在は図書館や店舗など、さまざまな施設で本の提案や読むという行為を思い出してもらったためのきっかけづくりをしています。私もそうなのですが、読書、とくに長文を読むには筋力が必要だと思っています。そして読書を怠ると、筋力は衰える一方。けれども、また徐々に読書を習慣にすれば、はじめはヨチヨチ歩きだったのが、急に著者と歩幅が合う瞬間があつて、あの気持ちよさは最初から最後まで読み通してこそ味わえるもの。近年はSNSの普及で短くて感動できる言葉がもてはやされていますが、本来言葉は能率を競い合うものではありません。一言一句じっくり向き合い、人によっては高いところまでいって俯瞰したり、あるいは深いところで何かを感じ取ったりするのが言葉なのではないでしょうか。そういった意味でも、自発的に読書をするという行為は、有意義なことだと思います。

電子書籍もよいと思いますが、僕はやっぱり紙の本をお勧めしたいです。理由は3つあって、まず引用元など、責任の所在がはっきりしていること。2つ目に、後から書き直しができないので、推敲がしっかりなされていること。著者の熱い気持ちも言葉に定着しています。そして3つ目に、時間をコントロールできること。本を読んでいる最中に読み直したり、別の資料をあたってみたり。これは、選ぶ隙間さえ与えない動画配信サービスではなかなかできない体験です。

お気に入りの本があれば、傍に置いておくのもいいですよ。人間は物事を忘れられるから健やかに生きられる生き物。また好きなものが視界に入っている状態は、身体的に楽であり続けることもできます。つまり、部屋の片隅に大切な一冊があることで、安心して忘れることができのです。そしてせっかく保有するのなら、いつ読み直してもいいように、長く保存できる上質なハードカバーで。自分の鏡のような存在だと思いつつ、一冊、また一冊と相棒を増やしていくってください。



差し出し方の教室

幅允孝

弘文堂 予価 2970円(税込)

2023年1月中旬刊行予定

この本は、ブックディレクターとして様々な図書館をつくる著者が、本の「差し出し方」の違いによって相手への届き方が異なることに気づき、それを探求する一冊です。博物館の展示やソムリエのカウンター、動物園の生態展示に関する対話を基に、届きにくいものの伝え方を考えます。(幅)

弘文堂編集部より



弘文堂

幅さんが選書よりも大事にしてきたという「差し出し方」。博物館、動物園、ワインバー、Webを舞台に、距離を越えて想いを届ける方法を探ります。



幅氏がリニューアルに関わった「神奈川県立図書館」
photographed by DAISUKE SHIMA